

## 第1回アフターコロナ時代を見据えた経済社会構想検討会議 (R2.8.3)

## 特別委員の講演概要及び委員からの主なご意見

## 1 特別委員講演の概要

## &lt;藤野委員&gt;

- ・ コロナ禍の中で成長している会社と、成長していない会社が、はっきり分かれ、それが加速し始めた。成長している会社は圧倒的に若い会社が多く、なぜなら新しい会社は新しい変化に即対応できるからである。
- ・ 価値観については、男性的というよりは、女性的と言われているもの、垂直的なものよりは水平的なもの、ハードよりはソフト、あとは清潔さというところが今伸びており、恐らくアフターコロナでも非常に重要になってくるのではないかと。
- ・ 5Gの進展や通信ネットワークの発展で、住まいの変化、多拠点居住などの流れがすでに起きていた中で、この流れがコロナで劇的に変化することが予想されるが、そこで富山がこれから伸びるのではないかとするのは楽観的すぎる。
- ・ 今現実的に伸びているところは、例えば、軽井沢・那須・越後湯沢・箱根・熱海といった「都会的価値観の残る田舎」である。
- ・ 都会の人が移住するとしたとしても、完全な田舎には行きたくない。そこに都会的な何かというところを求めて行く。これは、これから私たちが考えるときに富山がどうすべきか、という解の一つではないか。
- ・ アフターコロナの時代で富山県がマーケティング競争にどう勝つのかという中で、すごく大事なものはマインドシェアの獲得。富山ということをどれだけ思い出してくれるのか。心の中のシェアをどれだけ獲得するのかというのが非常に重要。
- ・ 「小洒落たカフェやレストラン」はすごく大事。東京の人が移住するときにもものすごく考えているのは、おしゃれなカフェやレストランがあるかどうかということ。
- ・ 長期滞在する人にとって大切なことは、働く・遊ぶ・学ぶ・集う・食べることを一体化するような世界観。美しい土地・場所でおいしいレストランがあり、住まうところがあって、ここに人が集うということは、おそらく都会の人が望む地方のあり方の1つの解ではないか。そこに競争力があるから、競争力のあるところに競争力のある人が集まってくるということを作って、そこを県が支援するというのが1つの戦略ではないか。
- ・ 都会の人が来てくれるということは、女性が住みやすいということと非常にリンクしており、女性が流出しないということと、都会の人にに来てもらうということとの課題は一緒ではないか。そこで大事なものは、干渉しない・されない、安全に過ごせる、おしゃれでかっこいい、一人でも楽しい、家族でも楽しいということ。

<田中委員>

- ・ 社会の変化や現状をどう捉えるかがポイントであり、一つは、一極集中から分散へという時代になっていること。二つ目は、デジタルシフトの加速。ここにどう関わり、自分のところに取り込んでいくか。三つ目は産業構造の変化であり、イノベーション創出の機会だと捉えるということ。
- ・ 分散化になると、幸せなライフワークバランスは、どの場所で、どの地域で実現できるのか、皆が探し始めているとき。対東京ということではなく、多様な文化や自然、人材を有する地域の価値を今一度明確にして、それを生かしていくことが大事。
- ・ これを発見して充実・発展させていくことが地域の競争の源泉になる。また、住民、市民の方々は地域資源のサステナブルな活用に関心を高く持っており、プロジェクトチームの方は特にここに注視されるのではないか。
- ・ コロナでいろいろな経験をして、健康や自然との共存、心の豊かさというところに価値観が移っている。地域の「リ・デザイン」という意味で、分散化+適度な集積を最新にリ・デザインしていくということが問われるのではないか。
- ・ デジタルシフトについては、新しいビジネスチャンスがあり、新事業、地域産業、スタートアップとの連携ということがあるが、DXにおいては5G、AI、クラウドなどの基幹テクノロジーへの投資が進むので、民間との連携を強化して、富山をフィールドに実行してみようという人を増やしていくことが肝になる。
- ・ 今後の論点として、例えば富山の1番の強みとして皆さんが全国的に認識しているところはやはりコンパクト&ネットワークやサステナビリティがあるということなので、ここが強化・発展されるとよい。これらを進め、これからの危機的な社会の状況に立ち向かっていく上で「共創」と一緒に成し遂げる「協業」が大事。
- ・ ネットワークとか表層的なことではなくて、本当に人と人のネットワークのクオリティをどう追求していくかが重要。そのためには官、産、学、民の各セクターの知を共有して、融合して活用する社会的なプラットフォームづくりが必要であり、これは行政にしかできない。
- ・ 分散が起こると言われる中で、目指すべきは持続可能な経済モデルであって、地域の経済圏を形成して、地域で稼いだお金が地域で回るという新しい自給自足スタイルへの挑戦である。これが安心安全への担保になるので、活力ある地域経済の構築というのを農林水産、エネルギー、観光とかこのあたりを全部統合して、世界とつながりながら、素晴らしい富山モデルをどうつくるかというところに尽きるのではないか。
- ・ 新しい社会像というのは、新たな価値を創出している社会であり、それは住民、市民、県民の共感を得て、持続的に成長する地域社会の新しい姿となるし、これはデジタル革新とセットであり、DXの力を利用して、社会課題の解決と同時に、価値の創出を目指そうというようなことを呼びかけることがポイントではないか。

<武田委員>

- ・ 今回のコロナは、世界にさまざまな潮流変化をもたらしており、注目すべき潮流を3点挙げると、第1は「持続可能性の優先順位の上昇」、第2は「集中から分散・多極化へ」、第3は「デジタルの加速とリアルとの融合」である。
- ・ ポストコロナ時代に目指すべき社会を「レジリエントで持続可能な社会」と定義している。「レジリエントで持続可能な社会」とは、感染症などのショックに対しても柔軟に適應できる社会であり、また地球環境を維持しつつ経済の豊かさと個人のウェルビーイングを持続的に両立できる社会のことである。
- ・ この社会を実現するために、産業・企業分野で目指すべき方向は、デジタル×リアルでの付加価値の向上と、社会や個人が、自律分散による社会の強靱化と利他的視点に立った協調をそれぞれ目指すことである。自律分散と協調、この二つが「レジリエントで持続可能な社会」のキーワードである。
- ・ ポストコロナの産業・企業で重要なことは、やはり新たな需要の創造に着手すること。その鍵はコロナで生じた社会課題に対して技術を活用し、解決することである。密集回避や非接触・非対面、安全確保などの課題に対する技術の活用が進んでいる。
- ・ 企業にとってもう一つの課題は、レジリエンスへの意識向上である。二つの観点があり、1点目は、サプライチェーンの再構築で、国内回帰の促進や、部品の標準化の促進、それから調達先の複線化など、さまざまなことが今検討されている。もう一つは、マルチステークホルダー重視の経営。企業が事業を継続する上では、効率性だけではなく顧客や従業員、取引先、あるいはサプライチェーンに対しても安心・安全ということを考えていかないと、事業の継続は難しい。
- ・ 分散といっても田舎にどんどん分散するわけではなく、人口が減少するという現実には、真剣に受け止めなければいけない。実際にしっかり分散しながら自律的な地域社会を築くには、鍵となるのがデジタルガバメントということになる。
- ・ 分散をサステナブルにすることが非常に大事で、やはり、自律とセットでなければいけない。人口減少は進むので、減少が激しい地域では行政サービスを自力で担えなくなる。従って、デジタル管理ができるサービスや、あるいはインフラ管理などでの、自治体間の連携・協調は不可欠である。
- ・ また、エネルギーの地産地消を進めるため、電力取引や受注管理のデジタル化も必要。そうしたことがあって、国全体の自給率も上昇していくのではないかと。さらに自律して地域が成り立つには、産官学民による協調、これは単なる協調というよりはエコシステムをしっかりと形成するというのも大事。これらの取り組みが初めて、自律分散・協調型の地域社会が実現する。
- ・ ポストコロナの3つの潮流の下で我々が目指すべき社会と考えているのは、「レジリエンスで持続可能な社会」であるが、それを実現するための2つの軸が自立分散と協調であり、これをしっかりと取り組んでいけば、地域が自立的に輝いていけるのではないかと。

<川原委員>

- ・ アフターコロナの社会の変化の1つは、全てがオンラインファーストになるだろう。リアルな場所で行われるようなことでも、必ずオンラインのオプションが提示されて、そういったものと一緒に共存しながら進めていくことになる。ただ、住居が職場になり、生活の場、娯楽の場がいろいろなものを兼ねて境界が曖昧になる、そのめりはりをつけるのが一番大事になるのではないか。
- ・ 東京大学でも今学期はすべてオンラインで授業を行い、様々なメリット、デメリットが見えてきたが、これをもう少し一段引いた目で比べると、学校や職場、住居はどのような関係にあるべきなのか。学校が東京にある学生は、学校の近くに住むという選択をしている人が多いが、全部オンラインなので、必ずしも近くにいなければいけないわけではない。職場に関しても同じで、果たして東京に住んでいなければいけないのか。そういうことがオンライン化によって問い直されている。
- ・ 富山県にとっては、これはチャンスではないか。富山県以外にも東京以外の場所は数多くあり、その中で富山を選んでもらうための前向きな施策が問われている。
- ・ 情報技術で実はIターン、Uターンは、この区分け自体に意味がないのではないか。むしろ面白くなったのは、一つは東京の会社に勤めているが、住まいがほぼ地方というもの。もう一つはこれまでほとんど考えられておらず、新たなビジネスチャンスになるかもしれないのが、仕事のメインは地方で、住まいが東京というもの。
- ・ 観光産業をうまく刺激しながら、観光施設に長期滞在をしながら仕事をする 것도可能であるし、そういったものを進めるところに新しいチャンスがある。
- ・ 行政としてどこにリソースを費やしていくかといえば、ずっと住み続けるわけでも、旅行で一時的に滞在するわけでもない、1年に1回帰ってくるとか、夏の間だけ過ごす別荘、そういったところにもっと需要が出てくるかもしれない。出張で2、3日仕事をして、残りの前後の1週間を風光明媚な場所でリモートワークしながら過ごす。一時的かつ長期な滞在を受け入れるような施設をつくることもチャンスがあるのではないか。
- ・ 観光というのは一時的に人が来て楽しんですぐ帰って行くものだという発想を、いったん切り替えて、東京に住んだり地方に住んだりする、その受け皿として捉える必要があるのではないか。
- ・ デジタル技術というのは理解しにくく抵抗があり、そういうことに強い人がいないと手を出せないと思うが、1回使い始めてみると元に戻れないものである。これは差がつく一方なので、早いもの勝ちだと思う。ぜひ、行政でもデジタルを使いこなす人材をたくさん迎え入れて、いろいろなことを試してもらいたい。

## 2 委員からの主なご意見

- ・ 当社でもオンライン会議を行っているが、ネット環境の問題で途中つながらなくなったり、コミュニケーションが不足するなどの課題もある一方で、社員の6割近くがオンライン会議に肯定的であり、今まで会話できていなかったのが逆にオンラインでコミュニケーションが取れるようになったなどの意見もあった。
- ・ 新型コロナにより、東京一極集中をさらに是正しようという動きが出たことは、大変ありがたいことだと思っているが、富山県だけが何か事を起こしても、これは東京対富山ということになってしまうので、他の県との連携を強めて、大きなムーブメントをつくっていくべき。
- ・ 東京一極集中の問題について、東京に住んでおられる方々の意識も少しずつ変わってきているということで、今回のコロナの問題を契機にぜひこれを進めないと、もう二度とこの問題が解消されないのではないかと危機感を持っている。また、東京一極集中打破に向けて、人の意識だけではなく、税制など国としての仕組みも必要ではないか。
- ・ 日本という国は、何か大きな衝撃がないと変わらない国。コロナウイルスで、日本は大打撃を受けたが、この機にいろいろなことが変わるのではないか。トレンドが変わるといよりも、世の中が変わってしまうのではないか。
- ・ デジタル化を表す言葉として、自動化、それは無人化に近い自動化というところで、FA 産業とか、システム、それと IoT と、そういう技術がこれから付加価値を上げていくのではないか。デジタル化の推進に向けて、スタートアップ企業の力を伸ばしていくことも大切ではないか。
- ・ 6 月初旬に会員企業にアンケートを行ったところ、50 人以下の企業の 6 割以上が勤務状態は全く変わっていないという回答だった。デジタル化によるリモート、テレワークなどがいわれているが、残念ながら彼らの大半はできていないというのが実態であり、どうサポートしていくのが重要な課題。
- ・ 東京に一極集中ではなくて、地方にいろいろなものを分散しながら、地方がもっと元気になって、地方に就職していても東京にいるような気持ちで生活できるような、そういう地方であってほしい。
- ・ 富山県は位置的には首都圏、中京圏、関西圏からほぼ等しい位置にあるので、この三つの都市圏を相手に考える必要がある。産業の発展や今ある大学がもう少し学生を迎えられる体制づくりをしていくことが必要。
- ・ 観光を構成する要素というのは、見る、食べる、味わう、買う、遊ぶ、体験する、いずれもリモートやバーチャルではなかなか得難いのだが、現状はリモート、バーチャル体験しながらの観光にシフトしてきている中で、その辺の妙技というか、提案を期待したい。
- ・ 今、観光業の中でよく聞く用語としては、リモートツアー、従来の団体旅行から小

グループ化、小サイズ化になっている、あとはワーケーションという形。旅行業界特有の固定観念を変えていかないといけない時代なのかなと改めて感じた。

- とはいえ、現地を訪れるということが観光の一番のポイント、重要なゴールでもあるので、単にリモートツアーをやりましたというバーチャル上のものだけで終わるというのでは、地域に何も還元はできていない。リモートをやるにしても、それを地域還元にもどのように活用するのかということまで考えてやらないといけない。
- 私たちの社会構造としては、リスクを排除するのではなくて、リスクに対してどのように柔軟に対応できるのか、もしくはどのようにコントロールできるのかという社会を構築することが必要。
- 観光であれ、これからの移住先であれ、元々の富山県民がここに住むのであれ、富山を選ばなくてはならないというミッションを、まさに生活・文化・経済圏としてどのように示していくのかをプロジェクトチームで議論していただきたい。
- コロナによってビジネスモデルの大きな変革が起きるのではないか、マーケットの価値観の変化が起きるのではないか。ビジネスモデルの変革という意味では、分散型社会やデジタルトランスフォーメーションが社会のビジネスの隅々まで行き渡るということを予測して、富山にとっては千載一遇のチャンスだと位置付けて取り組むことができる機会である。
- 価値観の変化、生活重視、また、さまざまな持続可能性の高い人々の心に寄り添ったサービスが伸びてくるのではないか。
- 富山の強みであるコンパクト&ネットワーク、これをアフターコロナの時代にどう富山県として位置付けていくのか、どう再構築していくのかということが極めて重要。ネットワークの中で新たな需要を創造できるのか。また、鉄道、自動車、交通機関の中において新たな技術をどう活用していくのか。そういうことも視野入れながら検討してもらいたい。
- キャッシュレスが進むので、交通ICカード、スマホを活用したMaaS等の活用も進めていく必要がある。また、サイクルトレインや観光列車へのVRの活用など鉄道の新たな活用も検討していく必要がある。
- 介護現場でもICTやロボット化のテクノロジーの導入を進めてきたが、コロナでオンライン面会やZoom会議がさらに進んだ。今後もさらにデジタル技術を現場に合わせて導入活用して、サービス向上や生産性の向上、そして、職場改善を図りながら、新しいつながりや幸福感を創出できればよい。
- 医療についていえば、デジタル化が進んで、遠隔診療をすればOKだと言うには、今の技術はまだ未熟。もっとAIがしっかり医療に貢献するようなシステムが出来上がれば可能かもしれないが、それにはもうしばらく時間がかかると思う。
- 看護というのは、人と人のつながりが重要な部分で、がんであったり、認知症の患者さんには、やはり人と接しないとできない部分が非常に多い。しかし、それをやりながらでもAIやIoTなどを活用して、柔軟に対応していく必要がある。

- ・ 旅行のバーチャル体験といったような仕組みがもっとうまく私たちが使うことができれば、高齢者さんは自宅でそれを見られて、旅行している気分ですぐリハビリを家でやっていただくことが可能になるのではないかと。バーチャルでもいいからもう1回歩いている。もう1回旅行している。それはおいしいものを食べにいくでも何でもいいのだが、そういうことを味わえる場を、介護とか、旅行とか、いろいろなところがつながり合ってやっていけたらいいのではないかと。
- ・ 子供たちが活躍する次の時代は、どんな職業に就いても、また、職業に関係なく生活していく上でデジタルのノウハウは本当に必須になる。アフターコロナの時代において、全ての子供たち誰一人取り残すことなく同様な教育を享受できる環境を整えていただきたい。
- ・ これからは地方の勝ち組と負け組がはっきり出てくる、ということがよく分かった。産業界の方では、北陸の中でぜひとも新しい産業の創出をお願いしたいし、若い人の登用を積極的に行っていただきたい。官については、スマートシティの実現とか、5Gのインフラの整備が必須。もう一つは、教育への支援、協働もお願いしたい。
- ・ ITに強い人材を育成する時代に入ってきており、データサイエンス教育を学生、教員、企業に対し積極的に進めていきたい。
- ・ オンラインの時に、例えば同じビールを飲んでる感覚とか、あるいは香りとか、あるいは今ここにあるものをすぐ向こうに届けたいとか、そういったサービス、共有がさらに進んでいくと、リモートワークもより進んでくるのではないかと。
- ・ 調整力よりも企画力であるとか、人と人のネットワークのクオリティが重要であるという発言もあったが、まさにそういったことが重要。変化の激しい社会を生き抜いていく子供たちに必要な能力をどう身につけていくかということが、今まさに強く求められている時期。
- ・ DXなどが進む中で、デジタル弱者が必ず出てくるので、これをどうフォローしていくのか。相当頑張らないと中小企業、零細企業はついていけない。
- ・ デジタル化を進めなければいけないのだが、デジタルによって全て代替できるわけではない。むしろデジタルで済むものを探ることによって、医療だとか、介護だとか、あるいは観光もそうだと思うが、そのデジタルをうまく活用することで結果的に人と接する時間をより多く生み出す、リアルの価値を引き出す、そこがポイントではないかと。
- ・ 一極集中から地方の時代、それは地方全てが同じように考えているわけで、その中で選択されるには、いかに富山県の魅力を発揮するかということが重要。
- ・ 富山の方が富山県の素晴らしさを、客観的にすごくいいのに分かっていないということは、実は富山以外の方はもっと分かっていない。やはり富山の魅力をいかに伝えていくかということ、このアフターコロナの中でやっていくことは、大変重要。